

マヤ興亡：文明の盛衰は何を語るか？

著者	八杉 佳穂, Yasugi Yoshiho, ヤスギ ヨシホ
発行年	1990-08-16
URL	http://hdl.handle.net/10502/5663

第七章
社会組織

古典期のマヤ社会が、どのような社会であったかは、マヤ学者にとって、魅力のある問題の一つで、さまざまな意見がこれまでに提出されてきた。これからそれを検討していくのであるが、私自身は、古典期マヤ社会は、都市がたくさん存在し、それらが統一されていないか、江戸という考える。ちょうど、日本の戦国時代、または幕府のない江戸時代とでもいおうか、江戸という統一都市を除いた残りの領藩の関係をおもい浮かべれば、理解しやすいのではないかと思っている。戦国時代は、クニをまとまりの単位として、クニ同士で戦争をしたり、同盟をしたり、嫁どりで姻戚関係を作ったりしていたことを歴史を学んで知っているが、同様のことがすべてマヤにみられるからである。ごく当たり前のことのように、見逃されやすいが、クニの敵対や同盟などととも、それらのクニ（もしくは都市）が、同じ文字を使って、同じような考えを共有しているところなども、マヤと同じである。

古典期時代のマヤは、江戸を除いた日本というイメージが強いのであるが、これが後古典期後期のマヤパン時代になると、まさに江戸そのものという感じがする。それぞれのクニの指導者が、マヤパンの城壁内の町のなかで暮らしていたからである。

マヤ社会再構成の資料

マヤ社会の再構成は、考古学のデータに基づかなければならないが、なんといつても一番刺激的な情報は、碑文である。碑文の解読から、マヤの上層階級の社会がある程度描き出されるようになってきたのである。墓の情報や土器に描かれている情報がさらにそれを補う。これらはいわば歴史に登場する人物の社会を知る手段になるのであるが、歴史に登場しない人々、すなわちエリート層を支える農民や工匠人などの生活は、住居址の研究の成果がその再構成に重要な役割を果たしている。これら当時のナマ資料に加え、十六世紀以降の文献が参考になる。十六世紀以降の民族学的情報を利用して、住居の機能や社会階層などが推測されている。しかし文献は、マヤ文明の最盛期から八百年以上たった社会の記述であり、それをそのまま適用すると、まちがった解釈を下すことにもなり、十分注意しなければならない。

マヤ人は平和な神権政治のもとで暮らし、勝利や栄光の歴史など問題外で、時と神々の哲学を記録した、人類史上特異な民族とみなされてきた。石碑に刻まれている人物は神官であり、それに伴う文字は、暦や占い、宗教に関するもので、個人の歴史はまったく刻まれていないと長い間信じられてきたのである。一九四六年にポナンパックで壁画が発見され、そこに生々しい古代マヤ人達の戦いの姿が描出されているにもかかわらず、その考えは改められなかった。一九五〇年代から一九六〇年代にかけて、防御壁や戦いの場面などが存在することを確認した

考古学者たちが、平和なマヤという図式を変える必要があると説いたが、その主張にも耳は傾けられなかった。

ところが碑文の研究から、一九五八年にハイシリッヒ・ベルリンにより都市の紋章文字が発見され、一九六〇年にはタティアナ・プロスクリアコフによってピエドラス・ネグラスの王朝史が解明されて、古代マヤ人も他の歴史上の民族の例にもれず、戦争をし、征服し、王みずから誕生、即位などの歴史を記念碑に刻んでいたことがわかるようになってきた。

そればかりか、舌やペニスに穴を開けてひもをとおす儀式や、首をはねたり、腸をひき出す儀式などが、土器や絵文書や碑などに描かれており、おどろおどろしい儀式を行なっていた人々であることもわかってきた。こうして、長い間信じられてきた「平和のマヤ」理論はくずれさった。

都市と戦い

都市の紋章文字は、それぞれの都市の政治的独立と依存関係を明らかにし、マヤの都市間の関係は明瞭になってきた。文字からばかりでなく、考古学的にも、都市の中には防御用の壁や濠をもつものがみつかり、互いに敵対しあっていたこともわかってきた。たとえば、ユカタン半島のベカンの遺跡の中心部は、周囲がおよそ二キロメートル、幅が平均一六メートルの濠で囲まれていた。これを作った人々は、濠の内側にそって杭を打ち込み、防御壁を造っていた。

濠は水をはる濠ではなく、空濠であり、防御壁は紀元後一五〇〜四五〇年の間に造られたものといわれている。ティカルでは、北のワシヤクトゥンの間に防御濠が築かれているばかりか、南でも同様な防御施設がみつかつている。

後古典期には、マヤパンやトゥルムの防御壁が有名である。チチエン・イツアにもあった。こうした構築物はマヤ地域では約一五ほどみつかつている。メソアメリカに目を広げると、ほぼ全域に防御設備をみることができるとも、もちろんすべての遺跡に完備しているのではなく、そうした設備を持っているのは、ほんのわずかな遺跡にすぎない。たとえば、サポテカ文明の中心地といわれるモンテ・アルバンでは、三キロにも及ぶ防御壁が確認されている。その一部は紀元前二〇〇年以前のものという。アステカ文明の首都であったテノチティトランは、湖のうえにあり、堤道で導かれていた。それを封鎖することで、防御できた。コルテスらは征服の途中で、そうした防御設備をもった町の記述を多く残している。

では彼らは、どのような目的で、どのような戦いをしていたのであるか。記録に残るのは十六世紀以後のものにすぎない。有名なのはアステカの花の戦争である。神に捧げるための生贄を得るために、他の町を襲うことが記されている。非常に宗教的、儀式的なおいがする。はたしてそうであったのだろうか。それがそのまま八、九世紀のマヤに通用するのであるか。

戦いの場面で有名なのはポナンパックの壁画であるが、人物の髪をつかんで征服しているような場面や後ろ手にくくられた捕虜や支配者に足蹴にされた人物などが描かれている。戦いを

示す記念碑は、ヤシユチランのリンテルやトニナの石彫などが挙げられる。そうしたものを利用して、捕虜にされた人物の出身地と、捕虜にした町の関係をみると、町が征服されてしまったというふうにはとれない。ある町の支配者が捕らえられただけで、町そのものは征服されたようには思えないのである。

石碑には、ふつう月の情報が記されている。石碑が記す日の月齢は何日か、その日は二九日月か三〇日月のどちらか、六カ月を一単位とする太陰半年の何番目の月に当たるかが記されている。六カ月を単位とし、その何カ月目かという記し方は、恣意的なものであり、基準を決めなければならぬが、六八二年までは、その基準が各都市でまちまちであった。それ以後七五一年までは、各都市共通の表記法を用いた。その期間は、月齢だけでなく、半年周期の何番目を計算でだせるのである。この統一暦を採用したということは、各都市が強い絆をもっていたとみることができる。芸術様式からも、地方的な特徴が消え始め、マヤ独特の様式がはっきりし始める。マヤ地域全体の交流が激しく行なわれたことがわかる。都市間の同盟や戦争などのテーマが石碑に刻まれるようになる時期でもある。七五一年までの八〇年間に、マヤ全石碑の約六〇%が建てられたという。それ以後この統一暦は放棄されるのであり、またこれまで記念碑をもたなかった小さな都市で、記念碑が建てられ始め、テーマも軍事的な色彩が強くなってくる。競いあいがいっそう激しくなったとみることができる。それは戦国時代というにふさわしいのではなからうか。

社会組織のモデル

これまで古典期の政治社会組織に関しては、さまざまなモデルが提出されてきた。さきに触れた、神官たちが暦の計算に没頭していたという説は、平和な社会論とっていいものである。民族学の研究を利用して、同じような平和な社会が描かれたこともあった。ティカルやワシヤクトゥンなどの遺跡は、明らかに都市の機能を備えているのであるが、それは儀式センターにすぎなかったというのである。せいぜい神官などの宗教に従事する人が住むだけで、普通は人のいない空白の町であり、何かの宗教的行事があるときに人が集まるところにすぎなかった、とみる説である。これと焼畑農業に基づく説とが相まって、散村のような社会が想像されたのであるが、これでは最近の住居址の研究による、多量の住居のあとの説明ができない。

現在中米ではカルゴ・システムという宗教階梯組織がある。これは年ごとに宗教的な役割の階梯を昇っていく組織である。高位の役割につくためには、経験と年齢が必要であるが、同時に富と力も必要である。古典期のマヤ社会も、そうした制度を取り入れた社会ではなかったかという説も、同じような説である。これは儀式センター論とってよい。しかしこの制度は、最近の研究では、古い起源をもつものではなく、十九世紀から二十世紀に確立したことがわかり、実際、碑文でも確認できないものであった。

封建社会論とってよい説もある。土地の支配がもつとも重要であり、政治的権威と力が封

建領主から臣下へ広がるという封建制は、エリートが存在や引き続き戦争と相容れないものである。

紋章文字に基礎を置く都市階層理論もある。一九五八年、ベルリンは各都市ごとに特有の文字があることを発見した。紋章文字とよばれるその文字は、正確な意味はいまだ不明であるが、パレンケとかティカルと現在よんでいる遺跡の名と同じように考えてよい文字である。それらの紋章文字をもつ都市は限られている。そして規模が小さくなるにしたがい、紋章文字をもたなくなる。紋章文字をもつ小さい都市では、その近くの大きな都市の紋章文字が生起する。これらの生起型は、都市間の同盟や従属関係を教えてくれる。

ベルリン、バルテルの研究を基に、マーカスは、都市間の関係を紋章文字によって理論化した。すなわち、各都市にみられる紋章文字の現われ方は、都市間の関係を反映していると考えたのである。従属する都市は、上位の都市に言及し、その都市の紋章を記録するが、上位の都市は、従属する都市について触れない。上位の都市は、自分の紋章と、対等の都市の紋章しか記さない。紋章をもつ都市を第一級の都市として、紋章をもつがそれに従属していると考えられる都市を第二級の都市として、都市を分けていった。そして二つの石碑から、マヤは四つの支配圏にわかれていたと推測した。その二つの石碑とは、コパンの石碑Aとセイバルの石碑一〇である。コパンの石碑Aにはコパンのほか、ティカル、パレンケ、カラクムル（またはエル・ペルーと考えられ、まだ正しく同定されていないので地といわれることもある）の四つの紋章文字

が記されていた。その石碑が建てられた七三一年頃のマヤ世界の四つの首府というのである。セイバルの石碑一〇では、四つの紋章は、セイバル、ティカル、カラクムル（Q）、モトゥル・デ・サン・ホセで、これは八四九年頃の四つの首府を表わす。すなわち一〇〇年あまりで、パレンケ、コパンが没落し、そのかわりに、セイバル、モトゥル・デ・サン・ホセが勃興した。紋章をもたない町、紋章をもつ町、それらを統合する第一級の都市と階層化していたのである。マーカスの挙げた四つの都市ランクを挙げるとつぎのようになる。

第一 ティカル

ヤシュチラン

コパン

パレンケ

第二 ナランホ

ピエドラス・ネグラス キリグア

ポモナー

アグアテカ

マチャキラ

第三

ヒンバル

エル・カヨ

プシルハー

エル・レティーロ

イシュルー

ボナンパツク

ホヌタ

ワシャクトウン

ミラフロレス

トルトゥゲロ

第四

エル・エンカント

ラ・マル

ロス・イゴス

ティラ

シュルトウン

ラ・フロリダ

リオ・アマリリヨ

チュクティエバ

第一ランクの都市は、その地域で最初に紋章文字をもち、コパンを除いて、二つ以上の紋章文字をもつ。遺跡の規模も大きく、また他より、より多くの石碑をもつ。第二ランクの都市は、独自の紋章をもつが、第一の都市で言及されることはほとんどない。第一の都市と、結婚や同盟でつながっている。第三ランクの都市は紋章文字をもたない。第一ランクの都市への言及があつたり、第二ランクの都市にも触れていることがある。地理的には第一と第二の都市の間にある。王は捕虜となることが多い。第四ランクの都市は、紋章をもたず、言及されることもない。石碑も少ない。地理的に都市の周辺にある小さな町である。

たとえばティカルが支配した地域をみてみよう。第二ランクの都市はティカルの紋章をもっているという。しかし最近の研究では、ティカルの紋章と考えられてきた文字は、実はドス・ピラスのものである可能性が高くなり、マールカスの理論の前提が崩れた。ティカルの紋章文字と区別のつかない文字は、ドス・ピラスの周辺の八つの町で使用されている。

第三ランクの都市も同じように、ランク分けの基準に反する。ヒンバルやイシュルーの石碑は、ティカルの石碑よりあとに建立されたものであり、時代が異なる。わずかにティカルの石碑一が同時代にあたるに過ぎず、時代の異なるものをランク分けすることはおかしい。さらに第四のランクは紋章をもたない町であるが、シュルトウンの紋章が最近見つかった。ナクム

の石碑は損傷が激しく読み取れないので、ここにも紋章がある可能性が高く、その区分には問題があることがわかった。

コパンの石碑Aが刻まれた七三一年頃といえ、パレンケではチャクスツツの時代である。彼の誕生、即位が記されている『奴隸板』の最終言及日は七三一年であり、コパンの石碑Aと同じ日付であるが、その頃には衰退していたようで、次の石碑は七八三年までない。ティカルでも七三一年頃はA王の支配の終わりとB王の即位のはざまであり、力のあった時期とは言い難い。

マーカスの理論は、碑文の分析に基づいているように思えるのであるが、このようにみると、碑文の分析に基づいた説とは言い難い。しかしマーカスの説は魅力的であり、紋章文字に基づく諸都市間の関係の分析は、マヤ社会構造論の主役を演じることにかわりはない。

都市の規模に差があったことは、いろいろなところから、確かである。碑文の数や文字の多さは、その都市の大きさ、影響力の強さ、威信などと無関係であるはずはない。遺跡の規模や神殿の数なども、その都市の活動力の大きさをはかるよい指針である。たとえば広場の数から都市のランクをつけると、次のようになる。

八五 ティカル

四二+ ナランホ

- 二三 ワシヤクトウン
- 二〇 キナル、ヤシユハ
- 一七 カラコル
- 一六 ラ・オンラデス、ナクム
- 一一 ウカナル
- 一〇 タヤサル
- 八 チヨチキタン、イシユクン
- 七 シユルトウン
- 五 シユナントウニツチ、チユンウイツ、サンクレメンテ、ハツカブケエル、ホルムル、イシユル
- 四 カハル・ピチツク、イツイムテ、リオ・アスル
- 三 モトウル・デ・サン・ホセ
- 一 ウオラントウン

この分類は、紋章文字を基礎にした先の分類とはかなり異なる印象を受ける。

社会構造の変化は、建物より墓の分析からのほうがよくわかる。墓の規模や副葬品は、マヤ社会における埋葬者の社会的地位を直接反映しているからである。

副葬品からみた社会構造

バルトン・ラミーとワシヤクトウンの墓を分析して得られたことは次のようなもので、それは一九七〇年代に支配的な考えとなった。バルトン・ラミーの家屋で見つかった墓は、前期と後期では著しい違いがあった。前期では若い成人の墓がもつとも豊かだった。分析した墓のうち二二%が若い成人のものであったが、副葬品の五〇%がそこから得られた。それに対し、後期では、墓のうち一八%が若い成人のものであるが、そこから得られた副葬品は全体の一〇%にすぎなかった。成人の墓は、前期では全体の四四%に対し、後期では五九%であった。

ワシヤクトウンでは、立派な墓は、都市の中心部にみられる。しかし前期の終わり、宮殿様式の建物の出現とともに変化がみられるようになる。建物A-5は前期には四つの立派な墓があった。しかし後期には二四の成人の墓に加え、一二の若者の墓がみつかった。副葬品は、バルトン・ラミーの家屋で発見されたものよりいくぶん豊かにすぎなかった。

こうした墓の情報から、前期には周辺地域からやって来た富ある者が、儀式センターの神殿内に埋葬されたが、後期になると、宮殿に貴族層が住まうようになり、周辺と中心部の移動が止まり、あまり副葬品に差がなくなつたと考えられたのである。前期には若者が威信や地位を得るため、競いあって富を集めていた。志半ばで死んだものは、家屋に埋葬され、富を得たものは、中心部に進出し、そこで埋葬された。やがて富や地位の世襲がおこるようになり、富の

	若者層の 埋葬者	若者層の 副葬品	熟年層の 埋葬者	熟年層の 副葬品	若者層の 副葬品	熟年層の 埋葬者	熟年層の 副葬品
古典期 前期	22%	50%	45%	50%	18% (15/85)	44% (16/36)	75% (64/85)
古典期 後期	18%	10%	59%	80%	22% (55/250)	55% (43/78)	42% (104/250)
	Rathje(1970)				Welsh(1988) 英()内は発掘数の割合を示す		

表9 古典期前・後期の墓の埋葬者と副葬品の分析比較

集中化と階層の固定化がおこるようになった。すなわち、前期には、階級は固定化されず、力をもった若人が権力を得、支配しえたのであるが、後期になると王家が確立して、その家族が中心部を占めていたというのである。要するに、前期の社会は、交代で儀式センターでの役目を果たした、階層のない社会という意見であり、これは、当時支配的であった、カルゴ・システム論に則った意見であった。

ところがこのような推論のもととなったデータを検討すると、それは全然正確ではなかった。数値は上のようになり、これから先のような結論は引き出せない。

さらに、神殿や家族用の神殿、儀式基壇で見つかる墓は、確かに立派な墓が多いが、宮殿で見つかった墓の副葬品は、家屋で見つかるものとそれほど差はなかった。宮殿タイプの建物に

埋葬されたのは、召使や官吏のような階級であったとみられ、高貴な人は、神殿などの特別な建物内に埋葬されたのである。さらに横に広がる宮殿様式の建物は、形成期後期にはすでにエル・ミラドルやノフムルなどで存在していた。その当時すでに支配階級は形成されていたのである。

形成期後期以降、墓に埋葬された人の骨は、墓以外から発掘された骨より、体格が立派なこともわかった。つまり、栄養のいきとどいた世襲の支配階級が存在していたのである。

碑文の解読からも、マヤの支配階級の構造や歴史を知ることができるようになった。王の名のあとに、母の名、父の名の順で両親を記している場合が幾つも見つかっており、父親はその前の王であることがほとんどであるため、父から子への相続が行なわれていたこともわかった。ランダは、王が死ぬと長男が後を継ぐ、と記している。ヤシュチランの鳥ジャガーの妻の一人はティカルの紋章をもった女性で、ティカルから輿入れしてきたと考えられるが、この例のように、クニ同士が女性のやり取りで、姻戚関係をもつこともわかった。

住居址の研究

マヤ社会を理解するためには、中心地のエリート層の生活はもちろんのこと、それを支えた人々の生活も理解する必要がある。エリート層を支えた農民の生業形態はいかなるものであったか。工芸人や商人の生活形態はいかなるものであったのか。石碑や神殿のたつ中心地は都市

として機能していたのか、それとも儀式センターにすぎなかったのか。中心地とその周辺の住居址との関係はいかなるものであったのか。これらの疑問に答えるために、住居形態、セトルメント・パターンの研究がここ二十年あまりの間に活発に行なわれてきている。

住居址の研究はその焦点をあてることの違いにより、人口推定、生業適応、建築設計、サイトの大きさ、階層などの問題を取り扱うことになり、一口にセトルメント・パターンの研究といっても広大な問題をかかえている。

マヤの住居は、ふつう低い基壇の上に建てられた石壁造りの一、二部屋をもつ造りで、天井はしゅろ葺きのものであったので、基壇部分が残っている。そのため、住居址から一つの家族の大きさや構成がわかるし、個々の住居の集まり具合から、その小社会の構成が推測できる。もちろん機能をさぐるのはむずかしく、またそれ以上に住居址が同時代のものかどうか判定することはむずかしい。碑文があると何年に建てられたのかわかるが、それは大都市の中心部に限られる。放射性炭素年代測定や土器の型式が時代の判定になるのであるが、その単位は一〇〇年単位のもので、三、四世代を一度に含んだものとなる。それゆえ問題を多く含むが、住居址から、家族の構成や遺跡の人口などが積極的に再構成されている。

住居の型は小さいものから大きなものにしたがい、最小単位である単一住居址、それらが二つから六つ集まってできる群住居址、さらに群住居址が集まった結合住居址という具合に大きさの違いを区別できる。

マヤの住居は、二〇平方メートルぐらいが最小の広さであった。家全体を木やしゅろでこしらえ、後代に残らない造りのものもあつた。基壇のない住居は柱穴がみつかれればよいが、ふつうは探索不能である。大きな高い基壇の上に、石造りで、擬似アーチをもつ住居を建てたものもある。それは身分の高い人の住居と考えられる。住居址のなかには、床の下から墓や焼かれた部分が見つかる。焼かれた部分は炉であろう。石道具の破片や食物の残り、こわれた土器やメタテなどを捨てたごみ捨て場もみつかった。基壇は家の数を知る目印になり、そこからマヤ社会の人口が導きだされるが、基壇のすべてが住居に使われたのではない。貯蔵庫や神殿、台所などもあつた。石細工や土器造りなど特殊な仕事と結びついた住居址もある。一つの家に何人いたかも正確にはわからない。

これらの建物群は、中心に広場をもたない建物群と、広場をもつパティオ群の二つのタイプがある。ティカルでよく出現する形は、中庭の周囲三方を住居が占め、東側を小さな、しかし高い基壇に拡大家族の祠と思われる建物がある形である。

三つ目の単位は集合住居群である。五〜一二の群の集まりが、それぞれが離れ離れになって、全体で、大きなグループを形成している。そのなかには、他に比べて大きい群があり、それは首長の住居や管理建物や祠などとみられる。そうした住居址は階層を表わしているようで、富んだ人のまわりに召使などが住んでいたのではなからうか。工芸者集団の住居とみてよいものもあつた。

それらの規模が大きくなると、キリグアやティカルなどの中心をしめる部分となる。そこには神殿、球戯場、堤道、宮殿、記念碑などがある。人や貢ぎ物が集まる場所で、儀式、球戯、市場、送迎など多機能な場所であった。ここでも公的な部分と住居の私的な部分に分けることができる。

ティカルでは、建物の内部にしばしばベンチやポーチをもつ。これは南部ではごく普通の形である。これに対し北部のたとえばツイビルチャルトウンでは、二部屋造りで、長さに比べて広い。代表的なもの大きさを記すと、約二〇センチの低い基壇で、広さが八・八〇×七・五〇メートルの上に、五・五〇×三・六五メートルの家が建てられた。形は楕円形である。単一住居址は形成期から後古典期までであるが、古典期のものが一番多い。形成期の家は小さく、細長く、単一の部屋しかもたない。後古典期後期のユカタンのものは二部屋方式で、前室と後室にわかれる。ドン・ライスによると、ペテンの最小住居単位は、ティカルとヤシュハの全体の小建物の一五%を占めるといふ。

コパンの発掘は十九世紀の末に始まったが、居住形態の調査は、一九七五年から一九七七年にかけて行なわれた。人口をいかに養うか、政治支配は、宗教は、交易は、それらに対するコパンの影響力はいかなるものであったか、コパンの支配区域はどれほどであったかなどが調べられた。東西一二・五キロ、南北二、四キロのコパン川岸の沖積平野となだらかな丘の調査で約三四〇〇の建物跡がマッピングされた。

非常に人口稠密な地区が中心部の北と東にあった。すぐ東のセプトウラ地区はサクベといっている幅約一〇メートル、高さ約五〇センチの道で、中心部とつながれている。大マウンド CV-43 は文字をもつ神殿または宮殿をもっていた。エリート層の住居址であろう。そのまわりに粗末な住居址があった。召使などの住居であろう。北東のペタティリヤではダムと段々畑が発見された。

コパンでは、マウンドの数、大きさ、切石や彫刻の存在などを基準に四つの型が区別された。第一型は、もっとも単純なもので、いくつかの低いマウンドが広場のまわりにかたまっているもの。第二、第三型は、それより大きく、複雑になった複合体であり、もっとも複雑な第四型は、かなり大きなマウンドがたくさん集まり、質も高く、洗練された飾りなどがあるもの。それは儀式センターと通常呼ばれているものの規模の小さいものにあたる。センターは政治経済の中心地であるが、大きさ、配置、建築様式はそれぞれ異なる。小さいものは一平方キロ弱であり、逆にティカルなどは一二三平方キロもあった。遺跡の規模はもちろん、建築の洗練度、記念碑の数などは、相対的な政治経済力を反映している。大センターは中小センターを支配したことは碑文からも裏付けられる。大センター間の距離は、時代が変わってもそれほど変化はない。ある調査によると、次のようになる。

八・一八・〇・〇・〇

四一キロ

九・三・〇・〇・〇

六六・四三キロ

九・一三・〇・〇・〇

五七・五キロ

九・一八・〇・〇・〇

五二・一八キロ

従属する町との間は平均一一・三六キロ、最大二五キロで、中間点までの距離は一日の徒歩の行程内に入る。

各センターの領地の認定や都市間の関係は、住居址の研究や、各都市特有の文字である紋章文字の利用によってはっきりしはじめていたのである。

食べ物や水の確保が容易なところに集落が建てられたのはいうまでもない。そのほか交易に都合のよいとか、防御に都合のよいとかの戦略的によい場所に町は発展した。川沿いのヤシュチラン、ピエドラス・ネグラス、キリグアなどは、肥沃な地で農業に適しているばかりか、川が交易路として機能した。中央のティカルやワシヤクトゥンなどは湿地のなかの高地にあり、ペテン横断のカヌー輸送を支配でき、水の確保に便利であるばかりか、高生産の農業が行なえた。セロスやラマナイ、トゥルムなどは、カリブ海沿岸やカリブ海に通ずる川沿いにある。他では生産不可能な品を支配することで繁栄した町もあった。ツイビルチャルトゥンやサリナ・デ・ヌエベ・セロスでは塩、コルハでは良質のフリント、カミナルフユでは黒曜石、グアイタムンでは翡翠というように、それらのセンターは重要な交易品をもっていた。

階級と社会

十六世紀のユカタンでは、最上位に、ハラチ・ウイニック、またはアハウという称号をもつ人がおり、その下の支配者として、バタブがいたという。それら支配者階級は、アルメヘンと呼ばれる世襲の家族で占められていた。バタブの下にはアフ・クッチ・カブやアフ・クレル、アフ・ホルポップなどの役人にあたる人がいたと記されている。一般の人は、アフ・チェムバル・ウイニックとか、メンバ・ウイニック、ヤルバ・ウイニックなどと呼ばれ、奴隷はペンタックと呼ばれていた。將軍は、世襲のバタブと、選ばれるナコムがいたという。神官はアフ・キンであるが、チランやアフ・メンという預言者や呪術師にあたる人もいた。

古典期の碑文では、それらと同じ名を見いだすことはできないが、アハウやバタブの文字は見つかっている。碑文に登場する人物は、名を表わす文字に、いくつかの文字が連なって生起している。それらは称号を表わす文字に違いないが、十六世紀以降に記された称号は、まだ十分に適用できていない。